

教科書を科学し、時代（現実）を見つめる授業を

法政大学キャリアデザイン学部非常勤講師 幡野 龍一

1. 始めに～「社会科地歴科教育法」の授業

三つの柱で授業を行っている。第一は教育の理念・教育行政・教育現場などに触れ、教育について考察する。第二は教育実践を紹介し、社会科地歴科教育の課題・方法についての認識を深める。第三は教材研究から模擬授業の実施までの授業作りに具体的に取り組む。

第三の柱を通年の軸にして、第一・第二の柱を織り込みながら進めている。第三の柱「授業作り」の取り組み過程は、4つのステップをたどっている。第一段階（Step I）；教材研究。4月当初、学生は「授業作り対象（教材研究のテーマ）」を設定し、それについての教材研究を行っていく。第二段階（Step II）；「授業構成案」の作成。「教材研究」に基づき、授業計画（授業プラン）を作成する。具体的に中学生・高校生像を思い描いての授業計画作成である。前期後半は、学生の「授業構成案」発表と討論（演習）を実施している。後期は、第三段階（Step III）；「学習指導案（授業指導案）」作成。1時間の授業を作っていく作業。そして第四段階（Step IV）；「模擬授業」。模擬授業と討論（演習）を数回行っている。

この論稿は、それぞれの段階での学生たちの取り組み内容を紹介し分析、教師を目指す学生たちの課題を考え、併せて次年度以降の授業の改善を図っていくことを目指している。

2. 社会科授業とその目標

社会科の学習対象

「中学校学習指導要領（2008年3月）」⁽¹⁾

にもあるが、社会科の学習対象は、生活・社会・政治などあらゆる分野に広がっており、戦争・平和・貧困・差別・憲法・国際紛争・原発などの現代の諸課題に大きく関わっている。

社会科学習の特徴（＝「楽しさ」）！

第一は、「学習方法」の多種多様さ。新聞・テレビ・書籍・映画・音楽などどんな教材教具でも使え、調べる・観察する・話し合う・見る・表現する・作る・使うなど、学び方がたくさんあることだ。第二に、身近で具体的なもので学習が出来ることだ。地域・生活・自分の視点で、世の中・日本・世界、歴史などを分析し、人物や日常の出来事に触れながら、人間の生き様・社会問題、物の見方・捉え方を学ぶことができる。第三に、「点数」に関わりない多様な学習集団構成と共同学習で全ての生徒が参加する「平等な」学習ができるということだ。松・竹・梅などと習熟度別にクラスを分けずに、雑木林のような空間で学習が可能なのである。こうした社会科学習の特徴を生かせば「楽しい授業」が構想できる。

目指すもの

「高等学校学習指導要領（2009年3月）」⁽²⁾にもあるが、平和で民主的な国家・社会を形成する主体を育むことである。

そのためには、「時代（現実）」に対する関心・認識を第一に高めていくことが欠かせない。政治や経済の動向・貧困と格差・民主主義・共生・原発・核問題・温暖化防止など「時代（現実）」の諸課題と対峙していく姿勢を育んでいくことである。「時代（現実）」への関心とその分析を不断の学びと時代像の再構築のなかで鍛え、「社会科教育」を構想・創造し

ていつてもらいたいと考える。

3. 学生たちの取り組みから考えること

こんな授業を作りたい

前年度に《良い授業・悪い授業》というアンケートを行った⁽³⁾。《悪い授業》の経験として「教科書の用語を暗記する」「プリントの穴埋め」「板書だけ」「説明の間違いや曖昧さ」「生徒を理解しようとせず、生徒置き去りの授業」などが挙げられた。一方《良い授業》では「文献をみんなで解説」「様々な国地域の写真映像をもとに、世界の文化を考えた」「図書館で調べ班で発表」「現代との関連も教えてくれる」「事柄の背景について話してくれた」「コミュニケーションを通じて授業が展開」などの指摘がされていた。学生たちが願う授業像は、①教師の豊かな知識と判り易い教え方②生徒掌握③生徒主体となって展開される授業④話し合いと学び合い⑤考える授業である。

社会科学学習の現状

上記アンケートからも判るが、学生の間には、社会科は「暗記科目」で「知識量」重視の教科であるとの認識が広がっている。「なぜ」「どうして」と考えることや、他者との意見交換などとは無縁であり、「面白くない教科」とされ、社会科嫌いを広げている。一方で教科書も生徒の興味を引くことがない平板な記述で、正解の羅列・結果のみの記述〔=受験的事柄〕となっている。加えて、学習対象は、常に政治問題化していることだ。ために現実とは関わりのない無難な内容記述も多くなってきており、授業者（教師）もその話題には深入りしない傾向もある。考えず、時代（現実）と関わらない学習は「社会科の獲得目標」とは対極のものである。そこでは、主観（自己中心）主義と現状肯定（追認）主義が広がり、（現実に対して）無批判な人間が輩出されていってしまう。このような社会科学学習の現

状を克服すべく、毎年スタートしている。

2年生中心、模擬授業希望者も多い

近年の受講生の変化について述べたい。4年前（2011年度）の受講は31名で大部分が3年生であった。全員の模擬授業体験を願うが、無理なので希望者を募るが希望は少ないため私が指名して行ってきた。しかし近年は様子が変わってきた。今年度（2014年度）の受講は46名〔火曜・水曜〕で、7割近くの31名が2年生である。残り15名が3、4年生・科目履修生である。模擬授業も半数の23名が希望してきた。「履修可能であれば、早くに済ませたい」などの学生たちの思いの変化や厳しい就職状況などの要因もあると考えるが、ここでは触れない。ただ、学問研究・経験の1年間の差を感じる時もあることは事実だ。

教材研究のテーマ

今年度、学生たちが選んだ「授業作り対象（教材研究のテーマ）」は、地理分野7名・公民分野6名・歴史分野33名であった。内容は、地理・歴史とも多岐にわたっている（地理；欧米・中東・日本・オーストラリア・アフリカ。歴史；古代から現代まで広い分野）。東日本大震災に関わって「日本列島の地震・火山」「資源エネルギー問題（原発問題）」、集団的自衛権に関わって「戦後の日米関係」など時代（現実）と葛藤しようとするテーマもみられた。学生の学問研究対象と時代（現実）への問題関心が反映しているのであろう。

4年前は「文化〔5名〕」をテーマにしたものが多くみられた、学習指導要領とそれによる教科書の変化【構造的合理的の把握から、文化学習、伝統と文化理解へ】⁽⁴⁾も影響しているのであろう。

教育実習では実習校の設定したテーマ（単元）に従って教壇実習が行われていく。大学の「教科教育法」での授業研究のテーマは自由に学生が決められる。もっと積極果敢に「教材研究テーマ」を設定し、挑んでいくことを

期待している。

教材研究の取り組み

学生たちの教材研究の取り組み内容は「授業構成案」を提出させることによって、判断している。しかし今年も用語説明の羅列のみのレポートが多く見られた。歴史分野で多かった「第一次世界大戦・第二次世界大戦〔5名〕」で例示してみると、バルカン問題・サラエボ事件・総力戦と大量破壊兵器・ヴェルサイユ体制、ファシズム・ナチスの進撃・日独伊三国同盟・アジア太平洋戦争などの用語解説に、全員が終始している。織豊政権〔2名〕についても、天下統一過程を語りながら、天下布武・楽市楽座、刀狩り・太閤検地・朝鮮出兵などを箇条書きに説明している内容で、ここ数年の織豊政権テーマのレポート内容は変わっていない。「3.11」後の2011年には「環境問題」というテーマに集中した〔4名〕。その内容に期待したが、出されたレポートは、地球温暖化・オゾン層破壊・酸性雨・砂漠化・熱帯雨林減少・有機廃棄物の越境移動と「地球環境破壊」を一般的に従来通り説明するのみで、時代（現実）の急迫している原発・地球環境破壊防止にまで言及したものはなかったことが記憶に新しい。

「用語集」「辞典」「ネット」などからの引用によるものであろうか。労力には感心するが、「時代（現実）」と関わらず、「個々人の視点（思い）」の気迫が伝わって来ないものであるため、寂しい。「深耕浅植え」の如き、教材研究の深化を期待したい。

気にかかることがある。（生徒たちが使用する）教科書を十分に読み込んでいない（見てもいない?!）ことだ。「授業構成案」の提出とは、生徒たちとどんな学習を行うかという構想を述べることだ。そこで、教科書分析をせず（＝生徒たちを考えず）に、もっぱら学生自身のレポートを報告しているのである。教科書の学問的・科学的な分析こそ、格好の教材研究の導入になると考えており、講義で

もその点を強調しているのであるが…。

一般的な学生・市民向けの書籍や学問的な研究書までの教材研究には及んでいないレポートが多いが、研究書を読んだ上で更に地理教育研究会・歴史教育者協議会など教育研究団体関係の「教育実践書」にふれたり、『未来をひらく歴史』（2005年高文研）・『新しい東アジアの近現代史』（2012年日本評論社）といった最新の日中韓共同研究書を発掘してくれる学生も少なからず存在していることは喜びである。

「授業構成案」の作成と提出

6月に、「（教材研究を反映した詳細な）授業構成案」を提出させている。ここで教材研究を土台にしながら、かつ具体的に中学生・高校生像を描いての授業計画作成を行うのである。（学生たちの教材研究の取り組みは、前項で述べた。）導入の工夫や教材の発掘など検討を重ねたものも出てくるが、学生の「授業のねらい」「授業者の視点（思い）」が未消化である。この段階では授業を作っていくという差し迫った実感が無いのであろうと理解している。後期「学習指導案」作成段階になって、初めてぶつかる課題なのであろう。

学習指導案作成と模擬授業

1時間の授業を作る作業だ。授業の構想のベースとなるのは、前述の学生自身の思い（＝「こんな授業を作りたい」）である。しかし、作られた授業の多くは、教材教具の準備もなく、学生のレポート発表然となっているものが多々ある。学生たちが一番嫌っていたはずの「一方的な教え込み」の授業となってしまっている。

毎年感じることであるが、授業内容と展開が私の受けた学校教育時代からほとんど変わっていないものが見られることだ。学生たちの教材研究は、自身の教育体験・授業体験がベースになっている。高校時代のノートをみて、当時の授業を振り返って授業構想を練っている。「被教育体験」が変わらずに引き継が

れ、長らく同じような社会科授業が現出してしまっているのであろう。以下は 30 年以上経っても変わっていないものの例示である。

◆源平合戦〔一の谷・屋島・壇ノ浦など合戦の進行を日本地図と絵図で説明〕 ◆〔前述の織豊政権〕 ◆江戸の三大改革（足高制・定免法・目安箱・儉約令・上米制・寛政異学の禁・旧里帰農令・人返しの法・上知令などを羅列。田沼政治など「三大」以外は軽視） ◆明治維新〔五箇条の誓文・版籍奉還・廃藩置県・地租改正・学制・徴兵令など明治新政府の諸政策を平板に説明するのみ。転換期に生きた当時の民衆の状況には多くは触れない〕などである。

更に、時代（現実）との関わりが判然としない。「授業のねらい」「学ぶ意味」が不明であり、現代（の政治課題）とは全く関わりない知識だけを刷り込んでいる。

◆日本国憲法の三大原理〔9 条の現代的問題にふれず〕 ◆基本的人権〔生存権を朝日訴訟などで紹介するが、現代世界で起こっている人権侵害にはふれず〕 ◆三権分立〔行政権の圧倒的優位の現状は語らず〕 ◆日本の高度経済成長〔四大公害病を扱うが、水俣病などを解決済みのように捉え、過去のものとしている〕 などである。

また知識のみを問う「一問一答」式の授業展開がまだまだ多い。ただ、この段階になると、導入・教材教具の準備・授業展開（コミュニケーション・意見発表）などの工夫に、いくつか格闘が見られる。以下数例あげる。過去記憶に残るものも【 】にあげてみたい。

導入の工夫

- ①日本の気候；「コシヒカリ」「ひとめぼれ」「あきたこまち」など風土や気候に応じたコメの銘柄を使って、東北・北海道でも地域毎の気候の差・特徴があることを喚起。
- ②ケッペンの気候区分；気象学で有名なケッペンが植物学者であることなどを疑問も交えながら紹介。

【平安遷都；甲府の高校で授業という設定。甲府盆地に平安京城を重ね、生徒に実感を持たせようとした。】

教材・教具の発掘

- ①日本列島の地震・火山；発掘した明治期の高等小学校第 4 学年の『小學日本地理補習』（國光社編纂 明治 29 年文部省検定済）を読みながら、日本の地勢の特徴（火山列島）を学び、プレート・地震発生のメカニズム・防災へつなげていった授業。
- ②鎌倉政権；甲斐善光寺「源頼朝木像」を紹介しながら、教科書挿入の神護寺「伝 源頼朝像」を考える。
- ③元寇；教科書挿入の「（竹崎季長のみ描かれた）蒙古襲来絵詞」を『『蒙古襲来絵詞』から読み取れること（＝戦法・混成軍など）』『『蒙古襲来絵詞』を描いた意味（＝竹崎季長が自身の活躍を描かせ幕府に恩賞を求めた）』の視点で、教科書を科学的に批判した。
- ④元寇；長崎県松浦市鷹島の「開田の七人塚」を紹介し最激戦地「壱岐・対馬が受けた惨害」を学びながら元寇の実像に迫った。（学生の父親が壱岐出身というのが、教材発掘のきっかけ）
- ⑤司法（裁判制度）；刑事裁判の有罪率の国際比較から、日本の裁判を考えた。（「袴田事件」など冤罪の報道も影響している）

【「模擬授業（日本の朝鮮支配）；日本統治下の朝鮮の詩人尹東柱（ユン ドンジュン）の一生をたどり日本の朝鮮支配などを学ぶ…皇民化教育・創氏改名・治安維持法・拷問。】

授業展開

- ① 4 人くらいでグループ・ワークを行った後発表させて、全体で認識を共有していく学習スタイル。今年は講義式以外の問答式授業も増えてきた。
- ② 撰閣政治；幾人かの藤原氏の撰政就任時の天皇の年齢を調べ、記入させる作業プリントを使用＝撰政という職掌と外戚関係（外祖父を中学生に具体的に理解させようとし

た。

〔例〕藤原良房～娘明子の子どもの清和天皇（9歳）の摂政となる。

【都市問題；高度成長期以前と以後の東京・渋谷駅周辺の地図を比べながら、その大変貌から現在の都市問題を考える。】

4. 課題とその克服に向けて

前述の通り、学生たちの授業構想は、自身の教育体験・授業体験がベースになっており、作成される授業は、授業者が明確で意識的な視点（想い）を持たないかぎり創造的な授業とはならない。「(高校大学) 受験」に対応した知識偏重・暗記物授業が再生産されてくるのである。

その変革を目指すために2つの意見を述べたい。

教科書を科学する

教材研究の始まりは生徒たちが使う教科書である。教科書については後述の通り様々な問題を内包しているが、その教科書を十分に分析・検討して授業に向かっていくことは、非常に重要なことであり、教科書そのものに対する正確な認識を持つことが必要である。

以下、教科書についてのいくつかの問題点をあげる。

①学問的な分析が不可欠

過去にもあったが今年も「ABCD 包囲陣」に触れた模擬授業があった。アジア太平洋戦争開始直前の記述で、生徒使用教科書（山川出版社「詳説 世界史」）は「アメリカは…日本の南方進出を牽制して日本への石油供給を停止した。また、イギリス・中国・オランダと共に、ABCD ラインを形成して対抗した」としている。山川版世界史では「改訂版 高校世界史」「新世界史」も同じだ。この記述は「経済封鎖でおいつめられた日本」としている育鵬社など「新しい歴史教科書をつくる会」系の中学校歴史教科書と同じ立場である。更に

授業者（学生）は、東南アジアの白地図上にABCDの国々名を記入させるプリントを配布して授業を進めていった。加えてそのプリントにはマレー半島からシンガポール・フィリピンなどを「陥落」させていった日本軍の「快進撃」ぶりを日数入りで紹介している。どのような教材研究がなされ、生徒たちに何を学ばせていくつもりなのであろうか。

同じ山川出版社の「詳説 日本史」には「危機感を募らせた軍部は、ABCD 包囲陣による圧迫をはね返すには戦争に訴える以外に道はないと主張した」とある。また東京書籍「新訂 日本史」は「マスコミはABCD 包囲陣の脅威を報道し、国民の開戦熱をあおった」としている。三省堂「日本史 B」や多くの中学校歴史教科書には記載すらない。ちなみに山川出版社版『日本史広辞典』は「日本の南進阻止のための対日経済封鎖を日本側からよんだ呼称。日本の政府・軍部は対日包囲網が着々と進展しつつあると強調し、国民の敵愾心をあおった。」と記している。教科書記述に関しての学問的な研究と分析は欠かせないことの一例である。十分な教材研究の上で「学ぶ意味」「学習の狙い」が検討・構築されて、授業は作られていかなければならない。

②文科省による検定の実際を把握する

上記部分のほとんどの教科書項目名は「太平洋戦争」とされ、開戦（1941年12月8日）についての部分で「ハワイ真珠湾攻撃」は唯一太字で記述されている（「ハワイ真珠湾攻撃」の1時間前に実行された「マレー半島上陸」は太字ではない）。更に、真珠湾で炎上している米艦船の写真がある当時の新聞も併せて載せている。アメリカとの戦争は知っていても、アジアとの戦争は知らない日本人が作られているのだ。文科省も「アジア太平洋戦争」の記述を容認せず、検定では「太平洋戦争」に修正している⁽⁵⁾。また検定の影響であろうか、各社同じような記述が他の部分でもみられる。律令国家の「東北地方の開拓」図・日

付入の「日清戦争展開」図・日付入の「日露戦争展開」図などは全く同じ図柄なのである。

今後、政府文科省の教科書規制は更に強められていく。昨年（2014年）には「教科書に“政府見解を書かせる”」（1/17「教科用図書の検定基準」改定）、「教科書の記述を“審査”」（4/4「教科用図書の検定審査要項」改定）とされた。改定教育基本法・新学習指導要領及び政府見解に忠実な教科書がこれからも出現してくることが予想される。授業者は一層の教科書の科学的な分析と検討を進めていかなければならない。

③見えないものが多くある。

教科書に書かれていないものはたくさんあるという認識も必要だ。以下教例をあげる。

教科書・副教材で、遺物・出土品・絵画彫刻などの「実寸」「出典・所在」などの記載がなかったり、部分記載であるものが多く見られる。「モエンジョ＝ダロ出土の『印章』」「志賀島出土の『金印』」「（顔だけの）伝源頼朝像」などである。

「金印」が、辺 2.3cm・重さ 109g であり「伝源頼朝像」が縦 143cm 横 112.8cm ということを生徒たちが実感することは授業の豊富化にとって大切なことである。また掲載された「資料」は一部分のみであるという認識も欠かせない。高校世界史に頻出する「アメリカ独立宣言」は冒頭部分だけである。その後半に「先住民敵視、黒人奴隷無視」の姿勢が見て取れるのである。市民革命の自由・平等を享受できるのは「白人の大人の男だけ」なのである。昨年夏アメリカのミズーリ州ファーガソンで起きた白人警官による黒人少年射殺事件は以降も各地で続発した。今に至る黒人差別問題として、アメリカの負の遺産が考察できよう。日本史教科書と資料集には、植木枝盛「東洋大日本国国憲按」が掲載されているが、71条（抵抗権）・72条（革命権）が大書評価されている。しかし植木の資料の全貌（連邦制構想・人権規定・死刑制度否定・

土地国有など）を学び掴んでいくことは植木や私擬憲法を生徒たちが再評価・再認識していく機会ともなっていくと考える。

授業者が「資料」「出典」に直接あたって教材研究を深めていくことは、歴史（学問）そのものに迫っていくことも可能にしていく。日清戦争の挿絵としてジョルジュ・ビゴの『トバエ』1号（1887年2月）掲載の「魚釣り遊び」は中高教科書に多く使われているが、教科書の表題は「漁夫の利」と解説されているものが多い。教科書執筆者がビゴの絵で日清戦争の本質を語ろうとしているということでもある。他の挿絵では、京都清水寺『北天の雄 阿弋流爲・母禮頭彰之碑』（なぜ清水寺に建っているのか？）や蠣崎波響『夷酋列像』（なぜ仏・ブザンソン美術館に所蔵されているのか？）などが挙げられる。それらの検証は、歴史を学ぶ（学問する）ことの意味も考察していくことにつながっていくものである。

④考えさせない教科書＝考えない授業

「1086（応徳3）年白河天皇は突然幼少の堀河天皇に譲位し院政を開いた」と教科書は記述するのであるが、なぜ天皇を辞めて上皇（法皇）となって政治の実権を握るのかは判らない。白河は天皇として15年、上皇（法皇）としてはその3倍の44年君臨している。「なぜ？」を発想し院政の本質に迫っていく授業を作っていきたい。日清戦争も開戦理由が判らない教科書がほとんどだ。山川出版社『詳説 日本史』などによる開戦経過の記載は「①減税と排日を要求する農民反乱⇨②要請を受け清出兵⇨③対抗して日本出兵⇨④内政改革をめぐり対立⇨⑤8月日本宣戦布告」と平板な記述が並ぶだけで、なぜ日清開戦に至るのかが判らない。その点などを生徒たちで考え合う授業にしていきたい。教科書を学問の視点から分析して生徒たちと授業を作っていくことを期待する。

時代（現実）と関わり、時代（現実）を見つ

める授業を！

「なぜそれを学ぶのか」が判らない授業が続いている。少しも現実や生活とは関わらない内容だ。とりわけ政治経済的分野・近現代史・地理などで、その様な授業ばかりが展開されていると、社会科のつまらなさは一層増大していく。今の若者たちは、社会・政治・世界にあまり興味関心を示さないが、その一因にこうした社会科教育の実情が影響していると考え。授業で「憲法・国会・裁判所」「労働基本権」「北方領土」「中東問題」「地球環境」の知識は語るが、今に関わる「集団的自衛権」「尖閣問題」「イラク・シリア・イスラム国」「改憲」「就職難・労働環境」「気候変動枠組条約締約国会議（COP）」「再生可能エネルギー・原発」には触れない。学生自身が知らない・興味がないのであろうが、政治・教育政策・マスコミも含めた今の時代状況も反映して生起しているのであろう。

学生たちが政治・社会の情報をどのように入手しているかをアンケートで集めてみた⁽⁶⁾。それによると、自宅・下宿で新聞を取っていない；48%〔38人／79人〕、新聞をほとんど読まない・全く読まない；58%〔46人／79人〕、社会や政治などの情報入手手段【複数回答可】インターネットなど；86%、テレビ・ラジオ；63%、新聞；26%、その他【大学図書館・セミナー・現地・友人との会話など】となっている。今の学生の凡その状況が判る。インターネット、テレビ・ラジオが圧倒的で、新聞・雑誌・書籍など分析や考察を経た情報は遠ざけられている。「思考（考えること）」なしの、瞬時の「思い（思うこと）」で考え方・行動が決められていってしまう危険を強く感じる⁽⁷⁾。そうした状況に対して、学生自身も「多様な媒体から情報を得て分析していかないと、正確な情報が掴めない」「ネット普及で多くの情報にも接触できるが、大事なことは真実の情報を掴んでいくこと」など、情報獲得やメディアリテラシー育成の必要性をコ

メントしている。

学問研究自体も時代の要請・時代の課題と葛藤しているものとなっているのかも検証される必要がある。

私は授業ごとに、時事的な話題を「社会科通信（No1～30）」として学生に発信している。2014年5/6『新聞各社の憲法記念日社説』・6/3『大飯原発 再稼働認めず 福井地裁』・9/23『昭和天皇実録 公表』・10/14『朝日新聞の3つの訂正とお詫び』・1/20『あれから20年が過ぎた』などである。

時代（現実）と関わって思考を深化させていくことを大学の各種授業・学生たちの行動の場で追求していくことが大きな課題となっている。

5. 結び

社会科学習で目指すものは、「市民として生活する」「市民として社会を創る」力である。そのためにも科学的な認識と現代社会認識の構築は欠かせない。学問研究と時代（現実）への関わりは大事にしていきたい。

「教科教育法」での学習は、自己の学問研究の姿勢と内容が検証される場であり、大学での学習・研究の全てが試され見つけ直され、自己の成長につなげていくことができるものである。そんな授業を目指している。

「教室のドアを開ける時までが教材研究である」と学生たちに日常的な研究の姿勢と重要性を語ってきた。毎年模擬授業者が何回も推敲を重ねて授業を検討し、何度も資料を作り直している姿に出会う。真摯な姿勢にいつも感動をもらって、教育というものの姿を改めて振り返る機会ともなっている。学生諸君に感謝している。

註

- (1) 中学校学習指導要領 第2章 各教科 第2節 社会 第1目標

- (2) 高等学校学習指導要領 第 2 節 地理歴史 第 1 款 目標、第 3 節 公民第 1 款 目標
- (3) 2013 年度に法政大学、首都大学東京、工学院大学の受講生 100 余人から回答を得た。
- (4) 1951（昭和 26）年学習指導要領〔第 1 次改訂〕日本史の特殊目標「1」
1960（昭和 35）年〔高等学校学習指導要領第 3 次改訂〕日本史目標「1」
1989（平成元）年〔高等学校学習指導要領第 6 次改訂〕地歴科日本史 B 目標
- (5) 2014 年 4 月 4 日、出版労連「2013 年度教科書検定結果についての見解」
- (6) 2014 年度に法政大学、工学院大学の受講生 79 人から回答を得た。
- (7) 2013 年 1 月 8 日池澤夏樹 朝日新聞夕刊「終わり始まり」
「今、気になっているのは、みんなが『考える』より『思う』でことを決めるようになったことだ。五分間の論理的な思考より一秒の好悪の判断」「『思い』に自信が付き、『考え』を排除する。時には多くの人が手近に敵を見つけて叩くというゲームに熱中する。」